

## 熊本市の和傘製造業について

- 当館収蔵資料から -

湯川 洋史

### 1 はじめに

本稿では熊本市の和傘製造について述べる。殖産を目的にはじまった博覧会・共進会は、明治・大正・昭和を通して日本各地でおこなわれた。そこでは全国から出品があり、製品の改良とブランド化がおこなわれた。中には現在もその土地を代表する特産品として残っているものもある。一方、博覧会・共進会へ出品し、一時期は土地の名を冠した名物のように扱われていた品々であっても、今ではまったく姿を消したものもある。おそらく消えていったものの方が多いのではないだろうか。こうした消えていったものは、なぜ現在まで存続することが出来なかったのだろうか。

本稿で扱う熊本市の和傘も、肥後傘や熊本傘と銘打ち特産品化を目指したが、現在では姿を消したもののひとつである。本稿では当館に収蔵されている熊本市和傘関係資料を中心に、そのブランド化の動きと熊本市の和傘の基礎的事項について確認する。その上で、上記問題意識から熊本和傘を特産品として今日まで継続させなかった要因についても考えてみたい。

なお、本稿でいう熊本市は川尻町合併以前昭和14年(1939)までの熊本市を指している。

### 2 熊本市の和傘について

#### (1) 沿革

熊本市の和傘製造の沿革について、現在確認できたものは3点ある。それは『日本

和傘宝鑑訂補』<sup>1</sup>(以下、「宝鑑」)、『大正十一年調査 熊本市産業調査資料(和傘ノ部)』<sup>2</sup>(以下、「大正11年調査」)、『昭和十二年五月管内の林産物に関係ある特殊産業の調査研究 第五輯 和傘製造』<sup>3</sup>(以下、「昭和12年調査」)である。

それぞれ記述する沿革は似通っているが、細部では異なるところもある。ここでは時代的にもっとも新しい「昭和12年調査」の沿革を引用し、その後各沿革との相違について述べる。

斯業の起源に就き、伝ふる所に依れば、当地に初めて和傘技術の伝来せるは遠く元禄時代のことにして、爾来次第に発展して明治初年には四十数ヶ所の小工場を数ふるに到り、相当の活況を呈したり。同十二年頃より洋傘の進出するに及び、和傘は一時其の影を潜め、業者は全く経営困難の状態に陥り、次第に衰微の傾向を想はしめたるも、数年後再び実用的の和傘は市場に再現し、明治三十五年には大阪内国勸業博覧会に於て、当地出品者中入選の栄を得る者十数店舗に及ぶの好成績を示し、之れに力を得て、忽ちにして和傘同業組合の結成を見、製品の工夫改良、販路の拡張、宣伝等大いに努めたる結果、肥後傘の声価は頓に昂り面目一新の観あり<sup>4</sup>

この沿革からは熊本市の和傘製造の起源を近世期に求めていること、明治初年には40以上の小工場が出来て盛況だったが、洋傘の進出で一時衰微し、明治35年(1902)の大阪内国勸業博覧会出品を機にもう一度盛り上がっていったことが分かる。また、「肥後傘の声価」とあることから、肥後傘と

いうブランド名が当時用いられ、意識されていたと推測される<sup>5</sup>。

「宝鑑」もほぼ同様の沿革を記すが、沿革の調査者として熊本市の宮山豊八<sup>6</sup>の名前が挙がること、元禄時代の和傘製造者として百造という人間がいたという伝承のあること、大正2年(1913)の東京大正博覧会に和傘製造組合より2名の視察員が派遣され、このころより熊本傘も漆上げを用いるようになったという情報を記す<sup>7</sup>。

「大正12年調査」も上記沿革とほぼ同一内容だが起源を不詳とし、廃藩置県後和傘が一般に広く使われるようになってから熊本市の和傘製造の発展がはじまったという点と、西南戦争の影響による需要の低下という2点を記している。また、大阪内国勸業博覧会出品の結果について、「成績良好ナラザリシ」と悲観的に述べ、結果、「営業者ノ自覚スル所トナリ互ニ結束シテ組合組織ヲナシ或ハ視察員ヲ派遣シテ先進地ノ状況ヲ調査シ或ハ講習会講和会ヲ開催シテ技術ノ進歩ヲ図リ或ハ原料ノ共同購入ヲ為シテ生産費ノ低減ヲ計ル等専心品質ノ改良発達及販路ノ拡張ニ努メタル結果現今ノ如キ著シキ発達ヲ見ルニ至レリ」<sup>8</sup>とほか2つの沿革とは異なる調子で、大阪内国勸業博覧会出品の結果を捉えている。

熊本市の和傘製造の起源として述べられる元禄時代についての史料及び製造業者百造に関する史料は現状未発見である。近世期については、享和2年(1802)に「傘・挑灯細工之者共仲間申談も届兼且余職之者片手ニ仕候も有之、旁迷惑仕候ニ付職札銘々ニ被為拜領候様、再応願之書付委細記し有之候」<sup>9</sup>という記事があり、近世期に和傘職人がいたことは確かと思われる。また、内容

から近世期の和傘製造は専業者だけでなく、余職の者が兼業している場合もあったことが知れる。

次に契機として述べる大阪内国勸業博覧会への出品については熊本県からは和傘出品点数62点、出品人13人とある。1等から3等の受賞者は無く、褒状受賞者が5人という結果が報告されている<sup>10</sup>。上記集計は県別のため、熊本市からどれほど出品があったのかは不明である。また、熊本の和傘については点数が分かるのみで、文章では一言も触れられていない。このことから当時の熊本の和傘に対する評価は低かったものと思われる。この点から、3つの沿革の中で唯一大阪内国勸業博覧会出品の結果をネガティブに語る「大正12年調査」の記述がもっとも当時の実情に近かったのではないかと考えられる。

以上、3つの沿革を見る限りにおいて、熊本市の和傘製造では起源を元禄時代に求め、その発展の契機を明治35年の内国勸業博覧会に設定していることが分かる。内国勸業博覧会への出品結果をポジティブに捉えるか、ネガティブに捉えるかの差異はあるものの、この出品を契機に和傘業者の組織化、商品の質的向上に取り組んだことは確かと思われる。

## (2) 製造業者数と生産額

明治34年(1901)、同45年(1912)、大正10年(1921)の製造業者数と生産額についてまとめたものが、表-1である。

これを見ると、明治34年の熊本市には和傘製造業者30戸、従業員が男53人、女14人の合計67人が働き、生産額は4万445本とある。ほぼ10年後の明治45年には戸数

31戸、従業員は男77人、女13人の合計90人が働き、生産額は14万7977本に増加している。大正10年には戸数48戸、従業員169人、生産額17万3010本と順調に増加している。これが昭和12年になると戸数は28戸、従業員91名、製造本数も約6万5000本まで減少している。

このことから大正10年ころをピークに次第に減少しながら現在へ至っているようである。

表-1 市内和傘製造業者数および製造高

	製造戸数(戸)	従業員数			製造高	
		男(人)	女(人)	総計(人)	数量(本)	価格(円)
明治34年(1901)	30	53	14	67	40445	15623
明治45年(1912)	31	77	13	90	147977	64895
大正10年(1921)	48	-	-	169	173010	224913

※本表は、「明治三十四年熊本市生産品統計書 全」「熊本市史関係資料集 第6集 熊本市工業生産物調査 熊本市職業調査(明治後期)」、「明治四十五年大正元年熊本市工業統計」「熊本市史関係資料集 第6集 熊本市工業生産物調査 熊本市職業調査(明治後期)」、「大正11年調査」より作成した

### (3) 製造

熊本の和傘の製造工程は、「大正11年調査」に「繰込ミ、貫立、張り金付、張り方、油引、乾上、糸掛、籐巻、油シメ、漆引、乾燥等ノ順序ナリ」<sup>11</sup>とあり、1人1日の製造高は1本半もしくは2本とある。そのため、基本的には傘骨や轆轤などは岐阜や広島などと同様に別業者から購入して使用し、市内の和傘業者は張り仕上げをおこなっていたものと思われる。

ただ「昭和12年報告」を見ると、貫立や張りといった工程ごとの工賃が記載されている場合もあるから、張り仕上げの工程においても分業体制がとられていた可能性がある。ただ、同報告には「製造工程を可及的分業的にして生産費の節減を図る」<sup>12</sup>と課題が挙がる。さらに同報告には既製の骨を仕入れ製造する場合は分権料として骨の代価と併せて別に費用がかかるとあるから、

中には傘骨を自作する業者もあったと推測される<sup>13</sup>。これらから考えるに、熊本の和傘業界全体で完全な分業体制が敷かれていたわけではなく、業者ごとに製造体制は異なっていたようである。

明治34年の統計資料を見ると、従業員67人の内、職工は男20人、女5人、徒弟は男1人で、それ以外の41人は家人という内訳である。また、店規模を見ると全30戸中、従業員10人以上1戸、5人以上2戸、5人以下26戸となっている<sup>14</sup>。このことから、明治期の市内和傘製造業は家内制手工業で、徒弟はほとんどいない個人の家の仕事だったと言える。

また、明治45年の統計資料には副業・専業の別があり、先に示した表の製造戸数31戸とは別に副業で製傘業に従事する業者が5戸、副業で従事する従業員が12人いた<sup>15</sup>。この資料からは数値以上のことは分からない。だが、副業が見られるということは、この時点において市内和傘業が独立・採算性の高い仕事ではなかった可能性を示していると考えられる。

### (4) 販売方法と販売先

市内和傘業では卸専門と小売り兼業の2種の業者がいた<sup>16</sup>。販売を専門とする業者はいなかったようである。

現在確認できる中でもっとも生産額の多い大正10年、市内では17万本以上の和傘を生産していた。ただし、これは他所から移入してきた6万1000本を含む数字と思われる

表-2 大正10年生産額

生産額	移入額	移出額
173,010	61,000	161,357

※「大正11年調査」より作成

るから、実際には11万本程度を製造していたものと推定される。全体の3分の1程度をほかの産地から買入れて販売していたため、産地としてすべてをまかなうほどの生産能力を

有してはいなかったと言える。仕入先は表-3の通りで、主な仕入先は県内の山鹿町で3万1000本だった<sup>17</sup>。

販売については、主な出荷先は県下各郡で、県外でもっとも多い長崎県あてでも7600本程度、全体では4万6000本弱と全体の移出量の4分の1程度だった<sup>18</sup>。このことから大正期における熊本市の和傘製造では、大半が市外に出荷され、かつ主な出荷先は県内他郡だったと言える。

「昭和12年報告」では「熊本市における一ヶ年の生産高は凡そ六五、〇〇〇本にしてうち二割は地元、六割は県外に移出

表-3 市外和傘仕入先

仕入先	本数
山鹿	31,000
福岡	19,000
岐阜	3,000
香川	1,000
支那	7,000
総計	61,000

※「大正11年調査」より作成

し、一割五分は満州方面に輸出されつゝあり<sup>19</sup>と、県外への出荷が7割強を占めるという状況になっている。

熊本市の和傘は生産額に対する市内消費の割合が少なく、元々外部移出が多かったと言える。その移出先は、大正期は県内各郡を対象とし、昭和に入ると県外の占める割合が高くなったようである。この県内から県外へのシフトがどのような意図に基づいておこなわれたのかは分からない。同報告に市内需要の2万5000本の4割は市外製造品であり、その駆逐策として「製品の工夫改良は勿論、製造工程を可及的分業にして生産費の節減を図ると同時に、原料の共同仕入れ及び製品の販売統制を計る等、退嬰せんとする斯業の挽回に一段の奮起を要するものと認めらる<sup>20</sup>とあるから、市内および県内でのシェアを確保できなかったために県外への販売数が増えたようである。後に見るように当館収蔵品においても、山鹿町、川尻町、中津市の業者の和傘が見られるから、当時から市内へ他産地の和傘が移入されており、市内や県内でそれら他産地の和傘業者と競合するよりも新規販売先を県外へ求めたのだろう。その際、熊本傘や肥後傘といった名称で販売されたものと思われる。

### 3 当館収蔵の和傘関係資料

#### (1) 実物から見た製造技術について

当館所蔵の和傘は全部で17点ある。これを一覧にしたものが表-5である。この内、製造者が分かるものは11点ある。内訳は福岡県中津市竹下三倍傘製造株式会社製1点、山鹿町下川辰雄工場製1点、下益城郡隈庄町荒木商店製1点、川尻町大塚和傘2点、北新坪井町吉田屋傘店6点である。この内、

表-4 市内製造和傘県外出荷先

出荷先	本数(本)
長崎	7679
宮崎	5973
鹿児島	5973
福岡	4267
佐賀	1709
大分	2562
山口	856
京都	856
大阪	1709
東京	3414
北海道	856
沖縄	2562
台湾	3415
朝鮮	3415
満州	856
県内	115,255
県外	46102
総計	161,357

※「大正11年調査」より作成

本稿で扱う熊本の和傘と関係するものは吉田屋傘店製のみである。

熊本の和傘の特徴について、「大正 11 年調査報告」は以下 4 つの点を挙げる。それは①軒の 2 重張り、②女傘の柄を長くする、③飾糸に絹糸を用いる、④傘骨を染めるというものである<sup>21</sup>。

この 4 点について所蔵品を確認すると、①はすべての傘で見られ、②～④は見られるものと見られないものがあった。このことは上記①～④の特徴は熊本和傘を熊本和傘たらしめる特徴ではない、ということを示していると考えられる。もちろん、大正 11 年当時の特徴であるから、その時点では①～④の特徴を持つものを熊本和傘といったと定義することも可能だろう。だが、実際には中津市や山鹿町、川尻町で製造された和傘にも①～④の特徴は見られるし、岐阜や広島和傘を見れば、この特徴が熊本という地域の特徴を示すものと断言することは難しい。また、市内製造業者の吉田屋傘店の和傘を見ても、①～④の特徴が当てはまらないものも見られる。特に、④の傘骨を染めるという例はひとつもないから、時代的な差を考慮しても、熊本和傘＝上記の特徴を持つという図式は成立しないだろう。このことから熊本の和傘は他地域の製品と差異化できるような技術的特徴を有したものではなかった、ということが言える。

次に、熊本の和傘の製造技術について見る。現存する吉田屋傘店の和傘は日傘 3 点、蛇の目 2 点、両天用 1 点がある。これらを参考に往時の市内和傘製造技術について考えてみたい。蛇の目傘 2 点の内 1 点は子骨が外れているため全開不可能である。だが、3 割ほどは開くことが出来るから、その構造



写真-1 蛇の目傘(表-5 番号17)



写真-2 蛇の目傘(表-5 番号17)

などは把握することが出来る。2 点ともに骨数 60 間で軒径は約 45 ミリと細身である。柄は焼柄で、子骨を二つ割にして繋いだ子骨松葉を採用している。飾り糸も黄と緑の絹糸が 4 段かけられ、軒部分には蜘蛛糸がある。このことから、製造技術は一定の水準以上あったものと思われる。また、この 2 点の蛇の目傘を細かく見ると、持ち手の材・石突の有無・ハジキの材・貼紙の文言に違いが見られる。「昭和 12 年報告」を見ると、この時期に持ち手の材が籐からセルロイド製へ切り替わり始めたようだから<sup>22</sup>、1 の方はそれ以前の製造品ではないかと推測する。

次に日傘 3 点について見る。この内、2 点 (15・16) は「吉田傘出品」と書かれたガラス蓋付の木箱に入っていた。どちらも骨数 50 間で軒径は 35 ミリ、長さとおきの異なる骨を組み合わせ桜の花を模している。15 は鼠色の平紙の上から花卉様に切り抜いた白紙を貼り付けたもので、16 は淡い黄色の平紙の上から花卉縁に桜色、中心近くに黄

色の点を手書きしている。

3の日傘は表皮付の絹描絵で、收藏品中唯一の絹地の傘である。「昭和12年報告」は熊本の日傘の特徴に絹の二重張りを挙げているが<sup>23</sup>、上記資料は二重張りではない。薄い緑の絹地に白と黄の薔薇を描き、表皮付の親骨は親骨松葉が採用され、さらに柄は根付竹と凝った装飾の日傘である。

以上、5点を見る限り、吉田屋傘店の製造技術は高く、その技術の幅も広がったと言えると思われる。一方、すでに見た熊本和傘の特徴として挙げられていた点とは異なるところも多い。このことから実物を見る限り、熊本市の和傘に共通の特徴というもの



写真-3 日傘 桜型 (表-5 番号15)

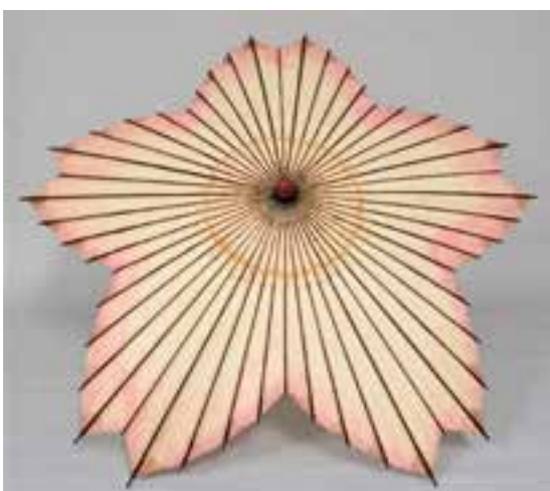


写真-4 日傘 桜型 (表-5 番号16)

は無かったと言える。



写真-5 日傘 表皮付絹描絵 (表-5 番号3)



写真-6 日傘 表皮付絹描絵 (表-5 番号3)

(2) 博覧会・共進会への出品とその利用次に、博覧会・共進会への出品とその利用について見る。吉田屋傘店の博覧会・共進会関係資料として褒状と賞牌がある。それを一覧にしたのが表-6である。

これを見ると大正2年から昭和3年までの期間で、40以上出品していることが分かる。熊本での品評会などへの出品をはじめ、東京や大連など県外への出品もおこなっている。こうした出品が吉田屋傘店の和傘製造技術にどのような変化をもたらしたのかは分からない。だが、こうした出品・受賞歴は製品の質の高さを示す宣伝として活用された。それは吉田屋傘店の和傘6点中4点に貼られている貼紙の文言から知ることが出来る。4点とも文言が多少異なるが、どれも博覧会・共進会での受賞歴を誇る内容と

なっている。こうした出品と利用は恐らく吉田屋傘店に限られたことではなく、熊本の和傘業者全体でおこなわれたことと思われる。そうした取り組みは産地としての熊本の名声を高めることに一役買ったものと思われるが、一方ですでに見たように熊本の和傘の特徴を生み出すまでには至らなかったと言える。

#### 4 おわりに

ここまで熊本市の和傘製造業について当館収蔵品を中心に見た。大正から昭和初期にかけての博覧会・共進会への多数の出品を通して、熊本は和傘産地として声価を高めたものと思われる。だが、熊本傘や肥後傘といった名称はあくまで産地名称としてのみ存在し、そこに熊本特有の技術や規則、製造工程や流通形態などは見られなかった。つまり、実態としては個々の業者が自家の和傘販売のために地名を冠した商品を販売してただけで、明確に熊本の和傘を規定するものは無かったと言える。そのため博覧会・共進会への出品も個人レベルの活用

にとどまり、博覧会・共進会を通して熊本の和傘ブランドを確立することが出来なかった。熊本における和傘製造は、熊本傘や肥後傘といったブランド化を漠然と志向したものの未成熟なままで終わったと言える。つまり、文言の上からは熊本傘や肥後傘といった地名を冠したブランドが存在したかのように読み取れるが、実際にはそのようなブランドは存在しなかったとも言える。それ故に和傘需要が全国的に落ち込むに従い、ほかの和傘産地と同じく衰退していったものと思われる。

#### 参考文献

脇田雅彦「岐阜の和傘」『日本民俗文化体系 第十四巻 技術と民俗(下巻)』1986 pp.527-529 小学館

岐阜市歴史博物館『館蔵品図録 和傘 資料選集』2012

広島市教育委員会『広島市郷土資料館調査報告書 第4集 広島市における和傘づくりとその技術』1989

<sup>1</sup> 高津太三郎『日本和傘宝鑑訂補』1926 pp.234-235 日本傘提新報社

<sup>2</sup> 新熊本市史編纂委員会編「熊本市産業調査資料 大正11年調査」『熊本市史関係資料集第5集 熊本市都市計画事業 産業調査資料(大正・昭和初期)』2001 pp.255-261

<sup>3</sup> 熊本営林局『館内の林産物に関係ある特殊産業の調査研究第五輯 和傘製造』1927

<sup>4</sup> 上掲書 p.18

<sup>5</sup> 当館所蔵の吉田屋傘店の製品には「熊本傘」の文言が見える。肥後傘と熊本傘の名称が混在していたものと思われる。

<sup>6</sup> 宮山豊八は安己橋通に店を構えていた製傘業者で、昭和5年当時熊本和傘業組合の組合長をしていた人物である。

<sup>7</sup> 高津太三郎『日本和傘宝鑑訂補』1926 pp.234-235 日本傘提新報社

<sup>8</sup> 新熊本市史編纂委員会編「熊本市産業調査資料 大正11年調査」『熊本市史関係資料集第5集 熊本

市都市計画事業 産業調査資料(大正・昭和初期)』2001 p.255

<sup>9</sup> 『熊本藩町政史料』2巻 細川藩政史研究会 p.198

なお、本稿に引用する際、異体字・旧字はすべて新字に改めて引用した。

<sup>10</sup> 第5回内国勸業博覧会事務局『第五回内国勸業博覧会審査報告7』1904 p.122

<sup>11</sup> 新熊本市史編纂委員会編「熊本市産業調査資料 大正11年調査」『熊本市史関係資料集第5集 熊本市都市計画事業 産業調査資料(大正・昭和初期)』2001 p.259

<sup>12</sup> 熊本営林局『館内の林産物に関係ある特殊産業の調査研究第五輯 和傘製造』1927 p.30

<sup>13</sup> 上掲書 p.26

<sup>14</sup> 新熊本市史編纂委員会編「明治三十四年熊本市生産品統計書 全」『熊本市史関係資料集 第6集 熊本市工業生産物調査 熊本市職業調査(明治後期)』2002

- 
- <sup>15</sup> 新熊本市史編纂委員会編「熊本市産業調査資料」『熊本市史関係資料集第5集 熊本市都市計画事業 産業調査資料(大正・昭和初期)』2001
- <sup>16</sup> 上掲書 p.257
- <sup>17</sup> 上掲書 p.257
- <sup>18</sup> 上掲書 pp.257-258
- <sup>19</sup> 熊本営林局『館内の林産物に関する特殊産業の調査研究第五輯 和傘製造』1927 p.26

<sup>20</sup> 上掲書 p.26

<sup>21</sup> 新熊本市史編纂委員会編「熊本市産業調査資料 大正11年調査」『熊本市史関係資料集第5集 熊本市都市計画事業 産業調査資料(大正・昭和初期)』2001 p.260

<sup>22</sup> 熊本営林局『館内の林産物に関する特殊産業の調査研究第五輯 和傘製造』1927 p.22

<sup>23</sup> 上掲書 p.30

表-5 当館収蔵和傘一覧

番号	種類	使用地	製造元	全長 (mm)	軒径 (mm)	径 (mm)	柄 (mm)	持ち手	石突	ハジ キ	軒2重 張	骨数 (間)	子骨	飾り糸	カッパ	蜘蛛 糸	裝飾	破損等	記録等
1	蛇の目	熊本市坪井 本市	吉田屋傘店(熊 本市)	785	45	-	焼柄 (上から 薄紙 巻)	藤 (上から 薄紙 巻)	無	鉄	有	60	松葉 着色なし	絹糸(黄)	紙	有	無	子骨外れ。全 間不可	貼紙「於各博覧会共進会名譽一等賞金牌數拾個受領 堅牢本位之熊本傘」
2	両天用	熊本市坪井 本市	吉田屋傘店(熊 本市)	705	68	1069	焼柄	無	無	鉄	有	50	着色なし	無	無	無	無	間全破損。開 閉可能	貼紙「明治大正昭和於各博覧会共進会名譽賞金牌 數十個受領 日本一傘の王 吉田屋傘店」
3	日傘	熊本市坪井 本市	吉田屋傘店(熊 本市)	727	45	807	根付竹	無	無	鉄	有	30	着色なし	絹糸(ピン ク)3	無	無	一部親骨破損		
4	蛇の目	熊本市坪井 本市	中津市竹下三 倍傘製造株式会 社	782	75	1095	竹	無	鉄	鉄	有	50	紫ク4	絹糸(ピン ク)4	鉄蓋、布の 下に紙	有	有 図柄有	間全破損。開 閉可能	貼紙「九州中津市竹下三倍傘製造株式会社(日豊線中 津駅)」
5	日傘	熊本市北部 町	不明	735	54	941	焼柄	金属巻	無	鉄	有	48	紺ク2	絹糸(ピン ク)2	無	無	青の平紙上 に白の2重 張	川上村字口山 村上重子	
6	蛇の目	不明	不明	800	55	1074	焼柄	セル籐	鉄	鉄	有	48	紫 絹糸(黄)3	鉄蓋・フイル ム	有	5本朱細線、 大朱纒1。全 体黒地に 月。	間全破損。開 閉可能	「小路町大島トミ子、月持ち手御から見たとときき れいに見えるよう接着面は表側	
7	日傘	熊本市菅原 町	不明	742	47	880	焼柄	セル籐	無	鉄	有	48	紫ク3	絹糸(ピン ク)3	無	無	紺張トン ボ、花	他者からきれいに見えるよう接着面は裏側	
8	蛇の目	熊本市川原 町	大塚和傘(熊本 市川原町)	812	52	1078	焼柄	セル籐	鉄	鉄	有	50	絹糸(赤・緑) 紫3	鉄蓋・フイル ム、つり草	有	紺張「蝶 花」	間全破損。開 閉可能	貼紙「大塚和傘製造元熊本市川原町」	
9	日傘	不明	不明	715	55	932	焼柄	金属巻	無	鉄	有	48	着色なし	絹糸(赤・青) 3	無	無	表白、裏紺		
10	蛇の目 (子ども 用)	熊本市坪井 本市	不明	680	59	900	焼柄	セル籐	鉄	鉄	有	42	紺 絹糸(赤)3	鉄蓋・フイル ム	有	樽様(花)・黒 地・金で鹿と 石灯	間全破損。開 閉可能	間の残りをみるにバラの貼紙があったよう	
11	番傘	熊本市菅原 町	不明	757	55	1070	焼柄	無	無	鉄	有	50	着色なし	糸なし	鉄蓋・フイル ム、つり草	有	軒に赤		
12	蛇の目	川原町	大塚和傘(熊本 市川原町)	836	60	1180	焼柄	セル籐	鉄	鉄	有	54	絹糸(赤・緑) 紫4	鉄蓋・布に紙	有	赤纒6。赤纒 (本)1。軒赤	間全破損。開 閉可能	貼紙「大塚和傘熊本市川原町和傘師茂即小売 品質優 良」	
13	蛇の目	川原町	下川原雄工場 (山鹿町)	850	54	1144	焼柄	籐	鉄	鉄	有	56	紺 絹糸(緑)3	鉄蓋・布に漆	有	黄細点線4、 朱大纒、黒 地に月		貼紙「株式会社農協新聞代理部 下川原雄工場 熊本県 山鹿町西通丁、月は裏張	
14	日傘	不明	下益城郡隈庄町	800	65	962	焼柄	籐	無	鉄	有	48	紫 絹糸(緑)3	無	無	表白、裏紺		貼紙「下益城郡隈庄町御詠和傘荒木商店商号福富屋」	
15	日傘	熊本市坪井 本市	吉田屋傘店(熊 本市)	807	35	910	焼柄	籐	無	鉄	有	50	着色なし	絹糸(緑・赤・ 白)4	無	無	桜型	貼紙「名譽一等賞二十八個受領熊本市北新坪井町吉田 傘屋」	
16	日傘	熊本市坪井 本市	吉田屋傘店(熊 本市)	790	35	1020	篠竹	無	無	鉄	有	50	着色なし	無	無	無	桜型	子骨2か所外 れ	
17	蛇の目	熊本市坪井 本市	吉田屋傘店(熊 本市)	810	44	1056	焼柄	セル籐	鉄	象牙 力	有	60	松葉 着色なし	絹糸(緑)4	布に紙	有	子骨松葉	貼紙「名譽一等賞數十個受領」	

※黄色は吉田屋傘店製

※軒径採寸は軽く握ってからおこなった。経年で広がっているから本来はもっと狭いものと思われる。

※柄の材はセル籐はセルロイド製の略(籐に代わる品として入ったのでセル籐と呼んだ)

※飾り糸の数字は段数

表-6 吉田屋傘店褒状・賞牌一覧

通番	年月日	宛名	品名	博覧会・共進会名	受賞など
1	大正2年10月15日	熊本県熊本市北新坪井町 吉田徳次郎	和傘 赤蛇ノ目	熊本製産品品評会	1等賞
2	大正3年5月5日	熊本県 吉田徳次郎	傘	長崎開港三百五十年記念全国特産品博覧会	2等銀賞牌
3	大正7年8月31日	熊本県 吉田徳次郎	傘	第3回帝国勲業共進会	進歩2等賞銀牌
4	大正7年10月15日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	第22回全国特産品博覧会	有功1等賞金牌
5	大正7年10月30日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	第6回国産奨励共進会	有功1等賞金牌
6	大正8年5月5日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	世界大戦平和記念全国特産品博覧会	有功賞金牌
7	大正8年6月15日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	講和記念勲業共進会	有功1等賞金牌
8	大正8年7月1日	熊本県 吉田徳次郎	蛇目三寸傘	戦後準備商品改良競進会	有功1等賞金牌
9	大正8年7月1日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	戦後準備商品改良競進会	進歩1等賞金牌
10	大正8年8月24日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	全国勲業博覧会	名誉賞牌
11	大正8年10月26日	熊本県 吉田徳次郎	和傘 各種	第25回全国特産品博覧会	名誉賞金牌
12	大正9年6月1日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	福井県特産品全国特産品全国美術博覧会	名誉賞
13	大正9年8月23日	熊本県 吉田徳次郎	蛇ノ目傘	全国特産品全国美術博覧会	名誉賞
14	大正14年9月5日	熊本県 吉田徳次郎	傘	大連勲業博覧会	3等賞
15	大正14年10月20日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	銀婚式奉祝国産共進会	銀牌
16	大正15年4月20日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	大牟田市制10年記念国産共進会	1等賞金牌
17	昭和3年5月10日	製傘業 吉田徳次郎		中外産業博覧会	功労賞
18	昭和6年5月10日	吉田徳次郎	和傘	国産新興博覧会	金牌
19	明治41年5月11日	熊本県 吉田梅次郎	傘	第5回全国生産品博覧会	褒状
20	大正4年4月21日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	九州沖繩勲業共進会	4等賞
21	大正4年11月25日	熊本県熊本市北新坪井町 吉田徳次郎	傘	大典記念国産共進会	1等賞金牌
22	大正6年7月1日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	第18回全国特産品博覧会	有功2等賞牌
23	大正6年11月2日	熊本市北新坪井町 吉田徳次郎	和傘	熊本工産品共進会	1等賞
24	大正7年4月25日	熊本県 吉田徳次郎	傘 七十間蛇ノ目	九州沖繩物産共進会	3等賞
25	大正8年6月15日	吉田徳次郎	-	講和記念勲業共進会	感謝状
26	大正8年8月24日	熊本県 吉田徳次郎	-	全国勲業博覧会	感謝状
27	大正8年10月10日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	国産雨傘履物博覧会	名誉賞牌
28	大正8年10月15日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	世界大戦平和記念重要物産審査会	進歩1等賞金牌
29	大正9年4月28日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	北日本文明重要品博覧会	進歩1等賞金牌
30	大正9年4月28日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	北日本文明重要品博覧会	有功1等賞金牌
31	大正9年11月9日	熊本市北新坪井町 吉田徳次郎	和傘	肥後山林会第1回熊本県林産物品評会	1等賞
32	大正9年11月9日	熊本市北新坪井町 吉田徳次郎	和傘	肥後山林会第1回林産品品評会	1等賞
33	大正9年11月20日	熊本市 吉田徳次郎	傘	熊本県物産館出品協会主催工産品展覧会	優賞
34	大正10年5月5日	熊本県熊本市北新坪井町 吉田徳次郎	傘	第14回九州沖繩8県連合共進会	2等賞銀牌
35	大正10年10月20日	熊本県 吉田徳次郎	実用蛇ノ目傘	戦後発展全国商工美術博覧会	名誉賞金牌
36	大正10年10月30日	熊本県 吉田徳次郎	雨傘	北海道拓殖博覧会	名誉賞牌
37	大正10年12月15日	熊本県 吉田徳次郎	蛇の目雨傘	全国特産品審査即売会	名誉賞牌
38	大正11年6月3日	熊本市 吉田徳次郎	和傘	拓殖協会主催第39回拓殖勲業博覧会	1等賞
39	大正14年4月27日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	熊本市事業記念国産共進会	1等賞金牌
40	昭和2年5月15日	熊本市 吉田徳次郎	二寸形入男其他	国有鉄道開通記念全国産業博覧会	感謝状
41	昭和2年5月20日	熊本県 吉田徳次郎	和傘	東亜勲業博覧会	出品記念
42	昭和3年11月22日	熊本県熊本市 吉田徳次郎	和傘	御大札奉祝記念熊本物産共進会	有功賞
43	欠(大正6年)	熊本県 吉田徳次郎	蛇之目傘	若松開港記念全国特産品博覧会	(欠)賞牌
44	大正11年	-	-	平和記念東京博覧会	銅牌
45	大正7年5月	-	-	鳥取市政30年記念全国特産品博覧会	賞牌
46	大正7年3月	-	-	第20回全国特産品博覧会	賞牌
47	-	-	-	農商務省府県連合共進会	-

※黄色塗りつぶし個所は褒状と賞牌がどちらもあるもの

※緑色塗りつぶし個所は賞牌のみがあるもの

※塗りつぶしが無い個所は褒状のみがあるもの

※19番褒状の宛名吉田梅次郎は馬喰町に店を構えた人物。吉田徳次郎との関係は現時点では不明